

信仰とは ヘブル 11:1-6

1. 信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人々はこの信仰によって称賛されました。(11:1-2)
 - a. 11章の内容を見る前に10章の最後を見てみよう。10章の終わりには、大きな報いをもたらすためあなたがたの確信を投げ捨ててはならない(10:35)、またイエスの再臨は近いので恐れ退いて滅びる者とならないように(10:39)という信者に対する勧告が書かれている。
 - b. 信仰とは現在形で今も働いているものである。言い換えれば信仰は死んでしまうこともあり、過去のもの、あるいは停滞するものになってしまうこともあり得る。常に活発な現在進行形の信仰を持つことは大切である。
 - c. 信仰は聞くものであって、必ずしも見ることによって得られるものではない。今私たちは見えないものよりも目に見える物質的なものに価値があると言われる世の中に生きている。もし私たちが実体があり触ることができる物しかない世界に生きていたら、私たちの心の目は開かれていなかったであろう。信仰とは神が私たちに何を語られたかという強い確信であり、多くの場合神が語られることは実体を伴わない。
2. 信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。(11:3)
 - a. 信仰について最も大切なことはそれをどこにおくか、ということである。聖書的に言えば神は創造主としてしばしばご自身を現される。すべては神の御手によって創造された、という主張であるが、これは古代昔から今に至るまで争点となっている。
 - b. 神は創造主であるというだけでなく、神の創造の方法もすばらしい。神はそのことばによりこの世にいのちを吹き込まれた。ここでも見えるものよりも見えないものの価値が強調されている。信仰も聞くことから始まり、見えるものからではない。
3. 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もお話しています。信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。(11:4-5)
 - a. この中にアダムとイブの名がないのは興味深い。私の個人的見解では、彼らに信仰がなかった、ということではなく、彼らは直接神とお会いして物理的な関わりがあったので信じるための信仰は必要がなかったからではないだろうか。
 - b. アダムの代わりにここでは神を直接見ることがなかった二人の礼拝者の名が挙げられている。信仰によってアベルはカインよりもすぐれたいけにえをささげた。ところがこの神に喜ばれる信仰というのは迫害を生む原因にもなる。迫害とはヘブル書に一貫して見られるテーマでもあり、信仰を持つ者にとって切り離すことのできないテーマである。
 - c. エノクについては、神が人類を滅ぼさせねばならないほど世に悪が満ちた時代に生きた人物、ということ以外にほとんど知られていない。神はノアの洪水が迫る前にエノクを天に引き上げられた。
4. 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。(11:6)
 - a. ここでは信仰が神との関係において果たす役割が述べられている。信仰は神と私たちをつなぐ媒体である。
 - b. 信仰とは神との関係でまず最初に来るものであるが、報酬という側面もある。信仰によってアベルやエノクが特別な祝福を受けたように、私たちも信仰によって恵みを受けることができる。